

樋口一葉

にぎりえ



に
い
ら
え

一

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら
寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だ
らう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほ
んとにお湯なら歸りにきつとよつておくれよ、嘘つ吐き
だから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らし
き突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひ

ぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻のちに後刻のちにと行過ゆきすぎる
 あとを、一寸舌打しながら見送つて後のちにも無いもんだ来
 る気もない癖に、本当に女房もちに成つては仕方がない
 ねと店に向つて鬩しきいをまたぎながら一人言ひとりごとをいへば、高たか
 ちやん大分御述懐だいぶごじつかいだね、何もそんなに案じるにも及ぶま
 い焼棒杭やけぼうくいと何なにとやら、又よりの戻る事もあるよ、心配し
 ないで呪まじなひでもして待つが宜いいさと慰なぐささめるやうな朋輩ほうばい
 の口振くちぶり、力りきちやんと違つて私わたしには技倆うでが無いからね、
 一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の悪るい者に
 は呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事

だ面白くもないと肝癩かんしやくまぎれに店前みせさきへ腰をかけて駒下
 駄のうしろでとんとんと土間を蹴けるは二十の上を七つか
 十か引眉毛ひきまゆげに作り生際はへぎは、白粉おしろいべつたりとつけて唇くちびるは人
 喰ふ犬の如く、かくては紅べにも厭いやらしき物なり、お力と
 呼ばれたるは中肉の背せい恰好かつこうすらりつとして洗ひ髪の大おほ
 嶋田しまだに新わらのさわやかさ、頸あがりもとばかりの白粉も栄はえ
 なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳ちのあたりまで
 胸むねくつろげて、烟草たばこすばすば長烟管ながぎせるに立膝たてひざの無沙法ぶさほうさも
 咎とがめる人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形おほがたの裕衣ゆかたに
 引ひかけ帯は黒繻子くろじゆすと何やらのまがひ物、緋ひの平ひらぐけが背

の処に見えて言はずと知れしこのあたりの姉さま風な
 り、お高たかといへるは洋銀の簪かんざしで天神がへしの鬚まげの下を
 搔かきながら思ひ出したやうに力ちやん先刻さつきの手紙お出し
 かといふ、はあと気のない返事をして、どうで来るので
 は無いけれど、あれもお愛想さと笑つてゐるに、大底たいていに
 おしよ巻紙ふたひろ二尋も書いて二枚切手の大封じおほふうがお愛想で出
 来る物かな、そしてあの人は赤坂から以来の馴染ではないか、
 少しやそつとの紛雜いざがあらうとも縁切れになつてたまる
 物か、お前の出かた一つでどうでもなるに、ちつとは精
 を出して取止とりとめるやうに心がけたら宜よかる、あんまり

冥利みよりがよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私わたしはどうもあんな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだと笑つてお前などはその我ままが通るから豪勢さ、この身になつては仕方がないと団扇うちばを取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑をかしく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間けん間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩しほ景気よく、空壇あきびんか何か知らず、銘酒あまた棚の上になら

べて帳場めきたる処もみゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音あほ
 折々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はななべ
 るも道理、表にかかげし看板を見れば子細らしく御料理おんりようり
 とぞしたためける、さりとして仕出し頼みに行たらば何とゆき
 かいふらん、俄にはかに今日品切れもをかしかるべく、女なこんにち
 らぬお客様は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふに
 かたからん、世は御方便や商売がらを心得て口取り焼肴やきざかな
 とあつらへに来る田舎ものもあらざりき、お力といふは
 この家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙あ
 りて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我

まま至極の身の振舞、少し容貌きりようの自慢かと思へば小面こづらが
 憎かげぐちくいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際つきあつては存ほかの外や
 さしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、
 ああ心とて仕方のないもの面おもざしが何処どことなく冴さへて見
 へるはあの子の本性が現はれるのであらう、誰たれしも新開しんかい
 へ這はい入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、
 菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近来まれの拾
 ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱かかへ主ぬし
 は神棚へささげて置いても宜いとして軒並びの羨うらやみ種ぐさに
 なりぬ。

お高は往来ゆききの人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて気にしてもるまいけれど、私は身につまされて源げんさんの事が思はれる、それは今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年ちがが違をが子があるがさ、ねへさうではないか、お内儀かみさんがあるといつて別れられる物かね、搆かまふ事はない呼出してお遣りやり、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦あきらめ物で別口へかかるのだがお前のはそれとは違ふ、了りようけん簡一つでは今のお内儀かみ

さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が
高いから源さんと一処ひとつにならうとは思ふまい、それだも
の猶なほの事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に
三河やの御用聞きが来るだろうからあの子僧に使ひやさ
んを為せるが宜い、何なんの人お嬢様ではあるまいし御遠慮
ばかり申まをしてなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるか
らいけないともかく手紙をやつて御覽、源さんも可愛さ
うだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に余念のな
きか俯向うつむきたるまま物いはず。

やがて雁首がんくびを奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、

又すいつけてお高に渡しながら気をつけておくれ店先で
言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土
方の手伝ひを情夫まぶに持つなどと考違へかんちがをされてもならな
い、それは昔しの夢がたりさ、何の今は忘れてしまつて源げん
とも七とも思ひ出されぬ、もうその話しは止め止めとい
ひながら立あがる時表を通る兵児帯へこおびの一むれ、これ石川
さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、い
や相変らず豪傑の声がかかり、素通りもなるまいとてずつ
と這入るに、忽たちまち廊下にはたばたといふ足おと、姉ねへさ
んお銚子と声をかければ、お肴さかなは何をと答ふ、三味さみの音ね

景気よく聞えて乱舞の足音これよりぞ聞え初ぬ。そめ

二

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉とらずんばこの降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂たもとにすぎり、どうでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌きりようよき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六畳に三味線さみせんなしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれてその次は親もとの調べ、

士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと問へばどうぞざんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあさうおもふてゐて下され、お華族の姫ひいさま様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無ぶ左法さほうな置つきといふが有る物か、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、畳に酒のまする流りゆうぎ気もあれば、大平おほひらの蓋であほらする流気もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰きまめの極きまりでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて

凄^{すさ}ましい物語があるに相違なし、唯の娘あがりとは思は
 れぬどうだとあるに、御覧なさりませ未^まだ鬢^{びん}の間に角も
 生へませず、そのやうに甲羅は経ませぬとてころころと
 笑ふを、さうぬけてはいけぬ、真^{しん}実^{じつ}の処を話して聞かせ
 よ、素性が言へずは目的でもいへとて責める、むづかし
 うござんすね、いふたら貴^あ君^{なた}びつくりなさりましたよ天下
 を望^{おほ}む大^と伴^{とも}の黒^{くろ}主^{ぬし}とは私^わが事^たとていよいよ笑ふに、こ
 れはどうもならぬそのやうに茶^ち利^やばかり言はで少し真^{しん}実^{じつ}
 の処を聞かしてくれ、いかに朝^ち夕^{やう}を嘘^{せき}の中に送るから
 とてちつとは誠も交る筈、良^お人^とはあつたか、それとも親^ゆ故^ゑ

かと真しんに成つて聞かれるにお力かなしく成りて、私だと
て人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります
る、親は早くになくなつて今は真実ほんの手と足ばかり、こ
んな者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではな
けれど未だま良人をば持ませぬ、どうで下品に育ちました
身なればこんな事して終るのでござんしよと投出したや
うな詞ことばに無量の感があふれてあだなる姿の浮気らしき
に似ず一節ふしさむろう様子のみゆるに、何も下品に育つた
からとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな
別品べつぴんさむではあり、一足そくとびに玉たまの輿こしにも乗れさうなも

の、それともそのやうな奥様あつかひ虫が好かでやはり
 伝でん法ぽう肌はだの三尺帯が気に入るかなと問へば、どうで其そこ処こら
 が落おちでござりましたよ、此方こちらで思ふやうなは先様が嫌いやなり、
 来いといつて下さるお人の気に入るもなし、浮氣のやう
 に思おぼ召しめましようがその日送りでござんすといふ、いや
 さうは言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰たれ
 やらがよろしく言ふたと他ほかの女が言伝ことづてたでは無いか、い
 づれ面白い事があらう何とだといふに、ああ貴君あなたもいた
 り穿索せんさくなさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは
 反古ほごの取かへツこ、書けと仰おつしやれば起証でも誓紙でも

お好み次第さし上ませう、女夫めをとやくそくなどと言つても
 此方こちで破るよりは先方さきさま様の性根なし、主人もちなら主人
 が怕こわく親もちなら親の言ひなり、振向ひて見てくれねば
 此方こちらも追ひかけて袖を捉とらへるに及ばず、それなら廃よせ
 とてそれぎりに成りまする、相手はいくらもあれども一
 生を頼む人が無いのでござんすとて寄る辺なげなる
 風情ふぜい、もうこんな話しは廃よしにして陽気にお遊びなさり
 まし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒
 ぎぬかうと思ひますとて手を扣たたいて朋輩を呼べば力ちや
 ん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が来るに、おい

この娘この可愛い人は何といふ名だと突然だしぬけに問はれて、は
 あ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふ
 と盆が来るに焰魔ゑんま様へお参りが出来まいぞと笑へば、そ
 れだとして貴君あなた今日お目にかかつたばかりでは御坐りま
 せんか、今改めて伺ひに出やうとしてみましたといふ、
 それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々
 お力が怒るぞと大景気おほ、無駄ばなしの取りやりに調子づ
 いて旦那のお商売を当て見ませうかとお高がなにぶんいふ、何分
 願ひますと手のひらを差出せば、いゑそれには及びませ
 ぬ人相で見まするとて如何いかにも落おちつききたる顔つき、よせ

よせじつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、かう見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかには遊んであるく官員様があります物か、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒賞だごほうびと懐中ふところから紙入れを出せばいだ、お力笑ひながら高ちやん失礼をいつてはならないこのお方は御大身ごたいしんの御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商売などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲団の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方あいかたの高尾にこれをばお預けなされまし、

みなの方に祝義でも遣はしませうとて答へも聞かずずん
ずんと引出すを、客は柱に寄かかつて眺めながら小言も
いはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何
宜いのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳
場の払ひを取つて残りは一同にやつても宜いと仰しや
る、お礼を申て頂いてお出でと蒔散らせば、これをこ
の娘の十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふては
みず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、
有がたうございますと掻きさらつて行くうしろ姿、十九

にしては更けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪るい事を仰しやるとてお力は起^たつて障子を明け、手^て摺^すりに寄つて頭痛をたたくに、お前はとうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此^{これ}品^れさへ頂けば何よりと帯の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時^{いつ}の間^まに引出した、お取かへには写真をくれとねだる、この次の土曜日に来て下されば御一処にうつしませうとて帰りかかる客をさのみは止めもせず、うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失礼を致しました、またのお出^{いで}を待ますといふ、おい程の宜い事をい

ふまいぞ、空誓文そらせいもんは御免だと笑ひながらさつさつと立つ
 て階段はしごを下りるに、お力帽子を手にして後うしろから追ひす
 がり、虚か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ、菊の井の
 お力は鑄型いがたに入つた女でござんせぬ、又形なりのかはる事も
 ありまするといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の
 女主あるじもかけ出して唯今は有がたうと同音の御礼、頼んで
 置いた車が来きしとて此処ここからして乗り出せば、家中表うちじゆう
 へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝義の余光ひかりとし
 られて、後あとには力ちやん大明神様これにも有がたうの御
 礼山々。

三

客は結城朝之助とて、自ら道楽ものとは名のれども
 実体なる処折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈
 強なる年頃なればにやこれを初めに一週には二三度の通
 ひ路、お力も何処となく懐かしく思ふかして三日見えね
 ば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄
 かひては、力ちやんお楽しみであらうね、男振はよし
 気前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、そ

の時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少し気をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廃やめにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たらどうだらう気違ひになるかも知れないとて冷評ひやかすもあり、ああ馬車にのつて来る時都合が悪るいから道普請からして貰どぶいたいたいね、こんな溝板どぶいたのがたつく様な店先へそれこそ人がらが悪わるくて横づけにもされないではないか、お前方ももう少しお行義を直してお給仕に出られるやう心がけておくれとずばずばといふに、エエ憎くらしいそのものいひを少し直さずは奥様らしく聞へまい、結城さんが来

たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之
 助の顔を見るよりこんな事を申てゐまする、どうしても
 私共の手にのらぬやんちやなれば貴君あなたから叱つて下さ
 れ、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告口つげぐちするに、
 結城は真面目になりてお力酒だけは少しひかへるとの嚴
 命、ああ貴君のやうにもないお力が無理にも商売してゐ
 られるはこの力ちからと思し召さぬか、私に酒氣さかけが離れたら
 坐敷は三昧堂さんまいどうのやうに成りませう、ちつと察して下され
 といふに成程々々として結城は二言ごんといはざりき。

或る夜の月に下坐敷したへは何処どこやらの工場の一連むれ、

井どんぶりたたいて甚じんく九かつぽれの大騒ぎに大方の女子おなごは寄集
 まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人ぎりな
 り、朝之助は寝ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、
 お力はうるささうに生返事をして何やらん考へてゐる様
 子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、
 何頭痛も何もしませぬけれど頻しきりに持病が起つたのです
 といふ、お前の持病は肝癩かんしゃくか、いいゑ、血の道か、い
 いゑ、それでは何だと聞かれて、どうも言ふ事は出来ま
 せぬ、でも他ほかの人ではなし僕ではないかどんな事でも言
 ふて宜さそうなもの、まあ何の病気だといふに、病気で

はござんせぬ、唯こんな風になつてこんな事を思ふので
すといふ、困つた人だな種々いろいろ秘密があると見える、お父
さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんつかはと問へ
ばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言
はれぬといふ、まあ嘘でも宜いいさよしんば作り言にしろ、
かういふ身の不ふしあはせ幸だとか大底ひとの女はいはねばならぬ、
しかも一度や二度あふのではなしその位の事を発表して
も子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお
前に思ふ事がある位めくら按摩あんまに探ぐらせても知れた
事、聞かずとも知れてゐるが、それをば聞くのだ、どつ

ち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつてもつまらぬ事でござんすとお力は更に取あはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打してともかくも下までお出いでよといふ、いや行きたくないからよしておくれ、今夜はお客が大変に酔ひましたからお目にかかつたとてお話しも出来ませぬと断つておくれ、ああ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いいのかへ、はあ宜いのさとて膝ひざの上で撥ばちを弄もてあそべば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら

御遠慮には及ばない、逢つて来たら宜からう、何もそんなに体裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戾しもひどからう、追ひかけて逢ふが宜い、何なら此処へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいからといふに、串談じょうだんはぬきにして結城さん貴君に隠はばくしたとて仕方がないから申まをしますが町内で少しは巾もあつた蒲団やの源七といふ人、久しい馴染なじみでござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家うちにまいまいつづろの様になつていまする、女房にようぼもあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではなけれど、縁いまがあるか未だ

に折ふし何のかのといつて、今も下坐敷へ来たのでござんせう、何も今さら突出すといふ訳ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障さわらず帰した方が好いのでござんす、恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござりますとて、撥を畳に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと騞なぶる、ああもう帰つたと見えますとて茫然ぼんとしてゐるに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあそんな処でござんせう、お医者様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つてゐるに、御本尊を拝みたいな俳優やくしやで行つたら誰れの処だといへば、見た

ら吃驚びつくりでござりませう色の黒い背の高い不動さまの名代
 といふ、では心意気かと問はれて、こんな店で身上しんしょうは
 たくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござん
 す、面白くも可笑をしくも何ともない人といふに、それに
 お前はどうして逆上のせた、これは聞き処と客は起かへる、
 大方逆上の性せしなのでござんせう、貴君の事をもこの頃は夢
 に見ない夜よはござんせぬ、奥様のお出来なされた処を見
 たり、びつたりと御出のとまつた処を見たり、まだまだ
 一層もかなしい夢を見て枕紙がびつしよりに成つた事もご
 ざんす、高ちやんなぞは夜ねる寐ねるからとても枕を取るよ

りはやくいびきの聲たかく、宜いい心持らしいがどんなに浦山うらやま
 しょうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這入はいると
 目が冴さへてそれはそれは色々の事を思ひます、貴君は私
 に思ふ事があるだらうと察してゐて下さるから嬉しいけ
 れど、よもや私が何をおもふかそれこそはお分りに成り
 ますまい、考へたとして仕方がない故人前おほばかりの大陽氣、
 菊の井のお力は行ぬゆきけの締りなしだ、苦勞といふ事はし
 るまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもい
 ふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて
 潜然さめざめとするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、

慰めたいにも本末もとすゑをしらぬから方ほうがつかぬ、夢に見てく
れるほど実じつがあらば奥様おくさまにしてくれる位いひそうな物だ
に根ねつからお声こゑがかりも無いはどういふ物だ、古風こふうに出
るが袖そでふり合あふもさ、こんな商売しょうばいを嫌いやだと思おもふなら遠慮えんりょ
なく打明うちあければなしを為するが宜よろい、僕は又お前のやうな気
では寧いっそ氣樂いきがだとかいふ考かんへで浮ういて渡わたる事ことかと思おもつた
に、それでは何か理屈りくつがあつて止やむを得えずといふ次第しだいか、
苦しからずは承うけたまりたい物ものだといふに、貴君あなたには聞きいて頂たま
かうとこの間まから思おもひました、だけれども今夜こんやはいけま
せぬ、何故なぜ々々なな、何故なぜでもいけませぬ、私は我まま故を、申まをす

まいと思ふ時はどうしても嫌やでござんすとて、ついと立つて椽えんがはへ出るいづに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろす町にからころと駒下駄の音さして行ゆきかふ人のかげ分明あきらかなり、結城さんと呼ぶに、何だとして傍そばへゆけば、まあ此処へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つばかりの、彼あれ子が先刻さつきの人のでござんす、あの小さな子心こころにもよくよく憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあそんな悪者に見えまするかとて、空を見あげてホツと息をつくさま、堪こらへかねたる様子は五音いんの調子にあらは

れぬ。

四

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな
 細露路、雨が降る日は傘もさされぬ窮屈さに、足もとと
 ては処々ところどころに溝板どぶいたの落し穴あやふげなるを中なにして、両
 側に立てたる棟割長屋むねわり、突当りの芥溜ごみためわきに九尺二間くけんの
 上あがりが朽がちまちちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さす
 がに一方口いつほうぐちにはあらで山の手の仕合しやわせは三尺ばかりの椽の

先に草ぼうぼうの空地はじ面、それが端を少し囲あをぢつて青紫蘇、
 るぞ菊、隠元豆の蔓つるなどを竹のあら垣からに搦はませたるがお
 力が処縁の源七が家なり、女房はお初はつといひて二十八か
 九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見え
 て、お齒黒はぐろはまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、
 洗ひざらしの鳴海なるみの裕衣ゆかたを前と後を切りかへて膝のあた
 りは目立ぬやうに小針のつぎ当、狭帯せまおびきりりと締めて蟬せみ
おもて表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと
 大汗になりての勉強せはしなく、揃へたる籐とうを天井から
 釣下げて、しばしの手数も省かんとて数のあがるを樂し

みに脇目もふらぬ様あはれなり。もう日が暮れたに太吉たきち
 は何故かへつて来ぬ、源さんも又何処どこを歩いてゐるかし
 らんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をば
 ちつかせて、更に土瓶どびんの下を穿ほくり、蚊いぶし火鉢に火
 を取分けて三尺の椽もちいに持出し、拾ひ集めの杉の葉を冠かぶせ
 てふうふうと吹立ふきたつれば、ふすふすと烟けぶりたちのぼりて軒場のきば
 にのがれる蚊の声悽すさまじし、太吉はがたがたと溝板の音
 をさせて母かかさん今戻つた、お父とちさんも連れて来たよと門かど
 口ぐちから呼立よびたつるに、大層おそいではないかお寺の山へでも
 行ゆきはしないかとどの位案じたらう、早くお這入はいといふに

太吉を先に立てて源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお帰りか、今日はどんなに暑かつたでせう、定めて帰りが早からうと思つて行水を沸かして置ました、ざつと汗を流したらどうでござんす、太吉もお湯ぶうに這入なといへば、あいと言つて帯を解く、お待お待、今加減を見てやるとして流しもとにたらい盥たらいを据へて釜の湯を汲くみ出いだし、かき廻して手拭を入れて、さあお前さんこの子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと為してお出いでなさる、暑さにも障さわりはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つてゐますからとい

ふに、おおさうだと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、そぞろに昔しの我身が思はれて九尺二間の台処で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手伝ひして車の跡押あと押しにと親は生うみつけても下さるまじ、あつまらぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父とつちゃん背中せなか洗つておくれと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々さつさつとお上りなされと妻も氣をつくるに、おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒ひせしさばさばの浴衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帯まき

つけて風の透く処へゆけば、妻は能代の膳のはげかかり
 て足はよろめく古物に、お前の好きな冷ひややつこ奴にしました
 とて小こどんぶり井に豆腐を浮かせて青紫蘇の香かたかく持出せば、
 太吉は何時しか台より飯櫃取おろして、よつちよいよつ
 ちよいと担かつぎ出す、坊主は我おれが傍そばに來いとて頭つむりを撫な
 でつつ箸はしを取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覚えの
 無くて咽のどの穴はれたる如く、もう止やめにするるとて茶椀を
 置けば、そんな事があります物か、力ちからわぎ業をする人が三
 膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、気合ひでも悪う
 ござんすか、それとも酷ひどく疲れてかと問ふ、いや何処も

何とも無いやうなれど唯たべる気にならぬといふに、妻は悲しさうな目をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴はちざかなは甘くもありませんたらうけれど、今の身分で思ひ出した処が何となります、先は売物買物お金さへ出来たら昔しのやうに可愛がつてもくれませう、表を通つて見ても知れる、白粉おしろいつけて美しい衣類きものきて迷ふて来る人を誰たれかれなしに丸めるがあの人達が商売、ああ我おれが貧乏すみに成つたから構かまいつけてくれぬなと思へば何の事なく済すましよう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つて

お出いでなさらう、二葉やのお角かくに心しんから落お込んで、かけ先
 を残のこらず使つかひ込み、それを埋うめやうとて雷らいじん神とら虎とらが盆ぼん筵ごぎさの
 端はしについたが身の詰つり、次第しだいに悪わるい事が染しみて終しまひに
 は土蔵どぞうやぶりまでしたさうな、当時いま男おとこは監獄かんごく入りしても
 つそう飯めしたべていやうけれど、相手あいてのお角かくは平氣へいけいなもの、
 おもしろ可笑をかしく世よを渡わたるに咎とがめる人ひとなく美事みごと繁昌はんしょうして
 めまする、あれを思おもふに商売しょうばい人の一徳いちとく、だまされたは此方こちら
 の罪つみ、考かんがへたとて始はじまる事ことではござんせぬ、それよりは
 氣きを取直として稼業かぎように精せいを出だして少すこしの元手もとても拵こしらへるや
 うに心こころがけて下くだされ、お前に弱よわられては私わたしもこの子こもど

うする事もならで、それこそ路頭に迷はねば成りませぬ、
 男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお
 力はおろか小こむらさき紫でも揚卷あげまきでも別荘こしらへて囲うたら
 宜うござりましよう、もうそんな考へ事は止やめにして機
 嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰気らしう沈ん
 でしまいましたといふに、みれば茶椀と箸を其そこ処に置い
 て父と母との顔をば見くらべて何とは知らず気になる様
 子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸たぬきの忘れ
 られぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、
 我おれながら未練ものめと叱りつけて、いや我れだとしてそ

の様に何時^{いつ}までも馬鹿ではいぬ、お力などと名ばかりも
いつてくれるな、いはれると以前^{もと}の不出^ふ来^でしを考へ出し
ていよいよ顔があげられぬ、何のこの身になつて今更何
をおもふ物か、食^{めし}がくへぬとてもそれは身体^{からだ}の加減であ
らう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分に
やつてくれとて、ころりと横になつて胸のあたりをはた
はたと打あふぐ、蚊遣^{かやり}の烟^{けむり}にむせばぬまでも思ひにも
えて身の暑げなり。

五

誰^たれ白鬼^{しろおに}とは名をつけし、無間地獄^{むげん}のそこはかとな
 く景色づくり、何処^{どこ}にからくりのあるとも見えねど、逆さ
 落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物とき
 くに、寄つてお出でよと甘へる声も蛇くふ雉子^{きぎす}と恐ろし
 くなりぬ、さりとも胎内^{とつき}十月の同じ事して、母の乳房に
 すがりし頃は手打^{てうち}々々あわわの可愛げに、紙幣^{さつ}と菓子と
 の二つ取りにはおこしをおくれと手を出したる物なれ

ば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に真からの
 涙をこぼして、聞いておくれ染物やの辰たつさんが事を、昨日きのふ
 も川田やが店でおちやつびいのお六めと悪戯ふざけまわして、
 見たくもない往来へまで担ぎ出して打ちつ打たれつ、あ
 んな浮いた了りようけん簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳いくつだと
 おもふ三十は一昨年おとし、宜いい加減に家うちでも拵こしらへる仕覚しがくを
 しておくれと逢ふ度に異見をするが、その時限りおいお
 いと空返事そらして根つから気にも止めてはくれぬ、父とつさん
 は年をとつて、母ははさんと言ふは目の悪るい人だから心配
 をさせないやうに早く締つてくれれば宜いいが、私わたしはこ

れでもあの人の半纏はんでんをば洗濯して、股引ももひきのほころびでも縫つて見たいと思つてゐるに、あんな浮いた心では何時いつ引取つてくれるだらう、考へるとつくづく奉公が嫌いややになつてお客を呼ぶに張合もない、ああくさくさするとて常は人をも欺だます口で人の愁うらきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、ああ今日は盆の十六日だ、お焰魔ゑんま様へのお参りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣こづかひもらつて嬉しさを顔してゆくは、定めて定めて二人揃そろつて甲斐性かひしようのある親をば持つてゐるのである、私が息子の与太郎よたろうは今日の休みに御主人から暇が出

て何処へ行つてどんな事して遊ぼうとも定めし人が羨うらやま
 しかる、父ととさんは吞のみぬけ、いまだに宿とても定まるまじ
 く、母はこんな身になつて恥かしい紅白粉、よし居処が
 分つたとてあの子は逢まゐひに来てもくれまじ、去年向島むかふしま
 の花見の時女房づくりして丸鬘まるまげに結つて朋輩ほうばいと共に遊び
 あるきしに土手の茶屋であの子に逢つて、これこれと声
 をかけしにさへ私の若なりく成なりしに呆あきれて、お母つかさんでござ
 りますかと驚おどろきし様子、ましてやこの大島田に折しふしは
 時好じこうの花はな簪はなかんざしさしひらめかしてお客を捉とらへて串談じようだんい
 ふ処を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる

時今は駒形こまかたの蠟燭ろうそくやに奉公してゐまする、私はどんな愁つ
 らき事ありとも必らず辛抱しとげて一人前の男になり、
 父ととさんをもお前をも今に樂をばお為させ申ます、どうぞそ
 れまで何なりと堅氣かたぎの事をして一人で世渡りをしてゐて
 下され、人の女房にだけはならずにゐて下されと異見を
 言はれしが、悲しきは女子をなごの身の寸燐まつちの箱はりして
 一人ひとりぐちすぐ人口過しがたく、さりとして人の台処を這ふも柔弱の
 身体からだなれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、
 こんな事して日を送る、夢さら浮いた心では無けれど言いひ
 甲斐がひのないお袋とあの子は定めし爪つまはじきするであら

う、常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕
 ぐれの鏡の前になみだ涕ぐむもあるべし、菊の井のお力とて
 も悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる子細あればこそ
 此ここ処この流れに落こんで嘘のありたけ串談にその日を送つ
 て、情なさけは吉野紙よしのがみの薄物に、螢ほたるの光ぴつかりとするばか
 り、人の涕は百年も我まんして、我ゆる死ぬる人のあり
 とも御愁傷さまと脇を向くつらさ他よそめ処目も養ひつらめ、
 さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたたまつて、
 泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投なげふして
 忍ねび音の憂き涕、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに

根生こんじょうのしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、
 障れば絶ゆる蛛くもの糸のはかない処を知る人はなかりき、
 七月十六日の夜は何処の店にも客きやくじん入込みて都々どど一
 端歌はうたの景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者たなもの五六人寄集
 まりて調子の外れし紀伊きいの国くに、自まんも恐ろしき胸間どうま声
 に霞かすみの衣衣紋坂ころもゑもんざかと氣取るもあり、力ちやんはどうした
 心意氣を聞かせないか、やつたやつたと責められるに、
 お名はささねどこの坐の中にと普ついつとほり通の嬉しがらせを言
 つて、やんややんやと喜ばれる中から、我恋は細谷川ほそだにがはの
 丸木橋わたるにや怕こわし渡らねばと謳うたひかけしが、何をか

思ひ出したやうにああ私は一寸無礼をちよつとしつれいします、御免なさ
 いよとて三味線さみせんを置いて立つに、何処へゆく何処へゆく、
 逃げてはならないと坐中の騒ぐに照ていちやん高さん少し頼
 むよ、直じき帰るからとてずつと廊下へ急ぎ足いでに出しが、
 何をも見かへらず店口から下駄はを履いて筋向ふの横町の
 闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれる物ならこのままに
 唐天竺からてんじくの果までも行つてしまいたい、ああ嫌だ嫌だ嫌だ、
 どうしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、
 静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ

行ゆかれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時いつまで私は止められてゐるのかしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だ
と道端の立木へ夢中に寄かかつて暫時しばしばそこに立どまれ
ば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳うたひし声をそのまま
何処ともなく響いて来るに、仕方がないやつぱり私も丸
木橋をば渡らずはなるまい、父ととさんも踏かへして落てお
しまいなされ、祖父おぢいさんも同じ事であつたといふ、どう
で幾代もの恨みを背負せおうて出た私なれば為するだけの事はし
なければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰た

れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれてしまふ、ゑゑど
 うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の
 井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずかそんな事も思ふまい、思ふたとてどうなる物ぞ、こんな身で
 こんな業ぎようてい体で、こんな宿世すくせで、どうしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する
 だけ間違ひである、ああ陰気らしい何だとしてこんな処ところに立つてゐるのか、何しにこんな処ところへ出て来たのか、馬

鹿らしい気違じみた、我身ながら分らぬ、もうもう販りかへ
 ませうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやか
 なる小路こうぢを気まぎらしにとぶらぶら歩るけば、行かよふ
 人の顔小さく小さく擦れす違ふ人の顔さへも遥はるかとほくに
 見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがりゐ
 る如く、がやがやといふ声は聞ゆれど井の底に物を落し
 たる如き響きに聞なされて、人の声は、人の声、我が考
 へは考へと別々に成りて、更に何事にも氣のまぎれる物
 なく、人立ひとたちおびただしき夫婦めをとあらずひの軒先のきさきなどを過ぐす
 るとも、唯我ただれのみは広野ひろのの原の冬枯れを行くやうに、

心に止まる物もなく、気にかかる景色にも覚えぬは、我
 れながら酷ひどく逆上のぼせて人心のないのにと覚束おぼつかなく、気が狂
 ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとして肩を打
 つ人あり。

六

十六日は必らず待まする来て下されと言ひしをも何も
 忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不ふ凶と
 出合であひて、あれと驚きし顔つきの例に似合ぬ狼あわ狽わてかたがを

かしきとて、からからと男の笑ふに少し恥かしく、考へ事をして歩いてゐたれば不意のやうに惶あはててしまいました。た、よく今夜は来て下さりましたと言へば、あれほど約束をして待てくれぬは不心中ふしんじゆうとせめられるに、何なりと仰おつしやれ、言訳のちは後にしまするとて手を取りて引けば次馬がうるさいと気をつける、どうなり勝手に言はせませう、此方こちらは此方ひとなかと人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、お力の中座をしたるに不興ぶきようして喧やかましかりし折から、店口にておやお飯かへりかの声を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法が

あるか、皈つたらば此処ここへ来い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階の座敷へ結城を連れあげて、今夜も頭痛がするので御酒ごしゆの相手は出来ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香かに酔ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んでその後のちは知らず、今は御免なさりませと断りを言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店たなものの白瓜しろうりがどんな事を仕出しいだしませう、怒るなら怒れでござんすとて小女こをんなに言ひつけてお銚子の支度、来るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くな

い事があつて気が變つてゐまするほどにその気で附合て
 ゐて下され、御酒ごしゆを思ひ切つて呑みまするから止めて下
 さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つ
 たを未だいまに見た事がない、気が晴れるほど呑むは宜いいが、
 又頭痛がはじまりはせぬか、何がそんなに逆鱗げきりんにふれた
 事がある、僕らに言つては悪るい事かと問はれるに、い
 ゑ貴君あなたには聞て頂きたいのでござんす、酔ふと申まをます
 から驚いてはいけませぬと嫣然にっこりとして、大湯呑を取よせ
 て二三杯は息をもつかざりき。

常にはさのみに心も留まらざりし結城よゆうすの風采の今宵は

何となく尋常なみならず思はれて、肩巾かたはばのありて背のいかに
 も高き処より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目
 つきの凄すごくて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉
 しく、濃き髪かみの毛を短かく刈あげて頸足ゑりあしのくつきりとせ
 しなど今更のやうに眺られ、何をうつとりしてゐると問
 はれて、貴君のお顔を見てゐますのさと云へば、此奴こやつめ
 がと睨みつけられて、おお怖いこわお方と笑つてゐるに、
 串談じようだんはのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知ら
 ぬが何か事件があつたかとふ、何しに降つて湧いた事
 もなければ、人との紛雜いざなどはよし有つたにしろそれは

常の事、気にもかからねば何しに物を思ひませう、私の時より気まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心からの浅ましい訳がござんす、私はこんな賤いやしい身の上、貴君は立派なお方様、思ふ事は反対うらはらにお聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其処そこほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は残らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑む事さかんなり。

何より先に私が身の自墮落を承知してゐて下され、もとより箱入りの生娘きむすめならねば少しは察してもゐて下さる

うが、口奇麗な事はいひますともこのあたりの人に泥の
 中の蓮はすとやら、悪業わるさに染まらぬ女子おなごがあらば、繁昌どこ
 ろか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、私が処へ来る
 人とても大底たいていはそれと思しめおぼせ、これでも折ふしは世間
 さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思
 はれるも寧いっそ九尺二間でも極きまつた良人おつとといふに添うて
 身を固めようと考へる事もござんすけれど、それが私は
 出来ませぬ、それかと言つて来るほどのお人に無愛想も
 なりがたく、可愛いみそめの、いとしいの、見初みそめましたのと
 出鱈目でたらめのお世辞をも言はねばならず、数の中には真まにう

けてこんな厄種やくぐざを女房にようばにと言ふて下さる方もある、持た
 れたら嬉しいか、添はうたら本望か、それが私は分りませ
 ぬ、そもそも最初はじめから私は貴君が好きで好きで、一日
 お目にかからねば恋しいほどなれど、奥様おくさまにと言ふて下
 されたらどうでござんしよか、持たれるは嫌なり他よ処そな
 がらは慕はしし、一ト口に言はれたら浮気者でござんせ
 う、ああこんな浮気者には誰れがしたと思おぼしめす召、三代伝
 はつての出来そこね、親父おやぢが一生もかなしい事でござん
 したとてほろりとするに、その親父さむはと問ひかけら
 れて、親父は職人、祖父ぢぢいは四角な字をば読んだ人でござ

んす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙ほごがみ
 をこしらへしに、版をばお上かみから止められたとやら、ゆ
 るされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、十六
 の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたけれど
 一念に修業して六十にあまるまで仕出来しでかしたる事なく、
 終おはりは人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常
 住歎なげいたを子供の頃より聞知つておりました、私の父と
 いふは三つの歳に椽ゑんから落て片足あやしき風になりたれ
 ば人中に立まじるも嫌やとて居職いしよくに飾かざりの金物かなものをこしら
 へましたれど、氣位じんあいたかくて人愛じんあいのなければ鼻負ひいきにして

くれる人もなく、ああ私が覚えて七つの年の冬でござん
 した、寒中親子三人ながら古浴衣ゆかたで、父は寒いも知らぬ
 か柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ
 へつへつついに破れ鍋なべかけて私にさる物を買ひに行けといふ、味
 噌しょうこし下げて端はしたのお銭あしを手握つて米屋の門かどまでは嬉
 しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて手も足
 も亀かじかみたれば五六軒隔どぶいたてし溝板の上の氷にすべり、
 足溜あしだまりなく転こける機会はづみに手の物を取落して、一枚はづれ
 し溝板のひまよりざらざらと翻こぼれ入れば、下は行水ゆくみづきた
 なき溝泥どぶどろなり、幾度いくたびも覗のぞいては見たれどこれをば何とし

て拾はれませう、その時私は七つであつたれど家の内の
 様子、父母ちちははの心をも知れてあるにお米は途中で落しまし
 たと空からの味噌こしさげて家には帰られず、立たつてしばらく
 泣いていたれどどうしたと問ふてくれる人もなく、聞い
 たからとて買てやらうと言ふ人は猶なほさら更なし、あの時近処
 に川なり池なりあらうなら私は定さだめし身を投げてしまひ
 ましたろ、話しは誠の百分一、私はその頃から気が狂つ
 たのでござんす、皈かへりの遅きを母の親案じて尋ねに来て
 くれたをば時機しほに家へは戻つたれど、母も物いはず父親てておや
 も無言に、誰たれ一人私をば叱る物もなく、家うちの内森しんとし

て折々溜息ためいきの声のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日断食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

いひさしてお力は溢あふれ出いづる涙の止め難ければ紅くれなひの手巾はんけちかほに押当てその端を喰くひしめつつ物いはぬ事こはんとき小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。

顔をあげし時は頬ほに涙の痕あとはみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私はその様な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜もこんな分らぬ

事いひ出してさぞ貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話
しはやめまする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、
誰れか呼んで陽気にしませうかと問へば、いや遠慮は無
沙汰、その父親てておやは早くに死なくなつてか、はあ母かあさんが肺
結核といふを煩つて死なくなりましたから一週忌の来ぬほど
に跡を追ひました、今居りましても未まだ五十、親なれば
褒めるでは無けれど細工は誠に名人と言ふても宜よい人で
御座んした、なれども名人だとして上手だとして私等が家の
やうに生れついたは何にもなる事は出来ないので御座ん
せう、我身の上にも知られまするとて物思はしき風情ふぜい、

お前は出世を望むなと突然だしぬけに朝之助に言はれて、ゑツと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落おち、何の玉たまの輿こしまでは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つてゐるに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれやれとあるに、あれそのやうなけしかけ詞ことばはよして下され、どうでこんな身でござんするにと打しほれて又もの言はず。

今宵もいたく更けぬ、下坐敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力はどうでも泊らするといふ、いつしか下駄をも蔵かく

させたれば、足を取られて幽霊ならぬ身の戸のすき間より出る事いづもなるまじとて今宵は此処こゝに泊る事となりぬ、雨戸を鎖とぎす音一しきり賑にぎはしく、後のちには透きもる燈火ともしびのかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡查の靴音のみ高かりき。

七

思ひ出したとて今更にどうなる物ぞ、忘れてしまへ諦あきらめてしまへと思案は極きめながら、去年の盆には揃そろひの

浴衣ゆかたをこしらへて二人一処くらまへに蔵前さんけいへ参詣したる事なんど
 思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事いづに出る張はり
 もなく、お前さんそれではならぬぞへと諫いさめ立てる女房
 の詞ことばも耳うるさく、エエ何も言ふな黙つてゐると横
 になるを、黙つてゐてはこの日すぐが過すされませぬ、身体からだが
 悪るくば薬も吞むがよし、御医者にかかるも仕方がなけ
 れど、お前の病どひはそれではなしに気さへ持直せば何処どこ
 に悪い処どがあるろう、少しは正気になつて勉強べんきやうをして下さ
 れといふ、いつでも同じ事は耳みみにたこが出来て気の薬に
 はならぬ、酒でも買かひて来てくれ気まぎれに吞んで見やう

と言ふ、お前さんそのお酒が買へるほどなら嫌やお言
 ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私
 が内職とて朝から夜よにかけて十五銭が関の山、親子三人
 口おも湯も満足には吞まれぬ中で酒を買へとは能よく能く
 お前無茶助みちやすけになりなさんした、お盆だといふに昨日きのふらも
 小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精しよつりよう靈さ
 まのお店たなかざりも拵こしらへくれねば御燈明おとうみよう一つで御先祖様
 へお詫わびを申まをしてゐるも誰たが仕業だとお思ひなさる、お
 前あほうが阿房を尽してお力づらめに釣られたから起つた事、
 いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しはあの子

の行末をも思ふて真人間になつて下され、御酒ごしゆを吞のんで氣
 を晴らすは一時とき、真から改心して下さらねば心元なく思
 はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に
 太く身動きもせず仰向あほのきふしたる心根の愁つらさ、その身にな
 つてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供ま
 で儲もうけし我れに心かぎりの辛苦くろうをさせて、子には檻ぼろ褌ろを
 下げさせ家としては二畳一間のこんな犬小屋、世間一体か
 ら馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋はるあきの彼岸ひがんが来れ
 ばとて、隣近処に牡丹ぼたんもち団子と配り歩く中を、源七が
 家へは遣やらぬが能い、返礼が氣の毒なとて、心切しんせつかは知

らねど十軒長屋の一軒は除のけ物、男は外出そとでがちなればい
 ささか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切
 なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕ちようせきの挨拶も人
 の目色を見るやうなる情なき思ひもするを、それをば思
 はで我が情婦こひの上ばかりを思ひつづけ、無情つれなき人の心の
 底がそれほどまでに恋しいか、昼も夢に見て独ひとりごと言にい
 ふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはててお力一人に命
 をも遣る心か、浅ましい口惜くちをしい愁つらい人と思ふに中々
 言葉は出いでずして恨みの露を目の中にふくみぬ。
 物いはねば狭いゑき家うちの内も何となくうら淋しく、くれゆ

く空のたどたどしきに裏屋はまして薄暗く、燈火あかりをつけ
て蚊遣かやりふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、
いそいそと帰り来る太吉の姿、何やらん大袋を両手に抱
へて母かかさん母かかさんこれを貰つて来たにっこと莞爾として駆け込
むに、見れば新開の日の出やががすていら、おやこんな好い
いお菓子をを誰れに貰つて来た、よくお礼を言つたかと問
へば、ああ能くお辞儀をして貰つて来た、これは菊の井
の鬼姉さんがくれたのと言ふ、母は顔色をかへて凶太い
奴めがこれほどの淵に投げ込んで未まだいぢめ方が足りぬ
と思ふか、現在の子を使ひに父ととさんの心をを動かしに遣よこし

おる、何といふて遣したと言へば、表通りの賑やかな処に遊んでゐたらば何処のか伯父さんと一処に来て、菓子を買つてやるから一処にお出といつて、我らは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つてくれた、喰べては悪るいかへとさすがに母の心を斗りかね、顔をのぞいて猶予するに、ああ年がゆかぬとて何たら訳の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者にした鬼ではないか、お前の衣類のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついて飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べても能いかと聞くだけが情な

い、汚い穢むさいこんな菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨てすて
 しまいな、捨ておしまい、お前は惜しくて捨てられない
 か、馬鹿野郎めと罵ののしりながら袋をつかんで裏の空地へ
 投出なげいだせば、紙は破れて転び出る菓子の、竹のあら垣打こ
 えて溝どぶの中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初
 と一声大きくいふに何か御用かよ、尻目にかけて振むか
 ふともせぬ横顔を睨んで、能い加減に人を馬鹿にしろ、
 黙つてゐれば能い事にして悪口雑言は何の事だ、知しつたひと人
 なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何
 が悪るい、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけに我をれへの

当こすり、子に向つて父親てておやの讒訴ざんそをいふ女房かたぎ氣質かたぎを誰たれ
 が教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだましは
 知れてみれど、妻たる身の不貞ふてくさ腐れをいふて済むと思ふ
 か、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の権がある、
 気に入らぬ奴を家には置かぬ、何処へなりとも出てゆけ、
 出てゆけ、面白くもない女郎めろうめと叱りつけられて、それ
 はお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に当つけよう、
 この子が余り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひ
 あまつて言つた事を、とツこに取つて出てゆけとまでは
 惨むごう御座んす、家の為をおもへばこそ氣に入らぬ事を言

ひもする、家を出るほどならこんな貧乏世帯の苦勞をば
忍んではゐませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら勝
手に何処なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食に
もなるまじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けて
も暮れても我れが店たなおろしかお力への妬ねたみ、つくづく聞
き飽きてもう厭いやに成つた、貴様が出ずば何どちら道同じ事
をしくもない九尺二間、我れが小僧を連れて出やう、さ
うならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が
行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそん
なら眞実ほんとうに私を離縁する心かへ、知れた事よと例いつもの源

七にはあらざりき。

お初は口惜くやしく悲しく情なく、口も利かれぬほどこみあぐ込上なみだる涕なみだを吞込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍かんにんを
 して下され、お力が親切で志してくれたものを捨てしま
 つたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたか
 ら私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひま
 せぬ、決してお力の事につきてこの後とやかく言ひませ
 ず、蔭かげの噂うわさしますまい故離縁だけは堪忍して下され、
 改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、
 差配の伯父なかうどさんを仲人なかうどなり里なりに立てて来た者なれ

ば、離縁されての行き処としてはありませぬ、どうぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうとこの子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤどうしても置かれぬとてその後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ体、これほど邪慳じやけんの人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるればこれほどまでも浅ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂つひには可愛かわゆき子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫わびたからとて甲斐かひはなしと覚悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父ととさんの傍と母かかさんと何処どちらが好い、言ふて見ろと言は

れて、我おいらはお父とつさんは嫌い、何にも買つてくれない物ましようじきと真正直をいふに、そんなら母さんの行く処へ何処へも一処に行く気かへ、ああ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといいひまする、男の手なればお前も欲しからうけれどこの子はお前の手には置かれぬ、何処までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何処へでも連れて行け、家うちも道具も何も入らぬ、どうなりともしろとて寐ね転びしまま振向んともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にし

ろもないもの、これから身一つになつて仕たいままの道
 樂なり何なりお尽しなされ、もういくらこの子を欲しい
 と言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞ
 と念を押して、押入れ探ぐつて何やらの小風呂敷とりいだ取出し、
 これはこの子の寐間着のあはせ袷あはせ、はらがけと三尺だけ貰つ
 て行まする、御酒の上といふでもなければ、醒さめての思
 案もありますまいけれど、よく考へて見て下され、たと
 へどのやうな貧苦の中でも二人そろう双つて育てる子は長者の
 暮しといひまする、別れば片親、何につけても不憫ふびんな
 はこの子とお思ひなさらぬか、ああはらはた腸はらはたが腐た人は子の

可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげ
て表へ出れば、早くゆけゆけとて呼かへしてはくれざり
し。

八

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、
新開の町を出し棺二つあり、一つは駕にて一つはさし担
ぎにて、駕は菊の井の隠居処よりしのびやかに出ぬ、大
路に見る人のひそめくを聞けば、あの子もとんだ運のわ

るいつまらぬ奴に見込れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立はなしをしてゐたといふ確かな証人もござります、女も逆上のぼせてゐた男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座るといふもあり、何のあの阿魔あまが義理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢ふたれば、さすがに振はなして逃る事もならず、一処うしろげさに歩いて話しはしてもみたらうなれど、切られたは後袈裟ほうさき、頬先きさのかすり疵、頸筋くびすぢの突疵つききずなど色々あれども、たしかに逃げる処を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲団やの時

代からさのみの男と思はなんだがあれこそは死花しにばな、ゑら
 さうに見えたといふ、何にしる菊の井は大損であらう、
 かの子には結構けつこうな旦那がついた筈、取にがしては残念で
 あらうと人の愁うれひを串じょうだん談だんに思ふものもあり、諸説みだ
 れて取止めたる事なけれど、恨うらみは長し人魂か何かしら
 ず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふ
 し飛べるを見し者ありと伝へぬ。

日本文学電子図書館

にごりえ・たけくらべ

著 者：樋口一葉

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

日本文学電子図書館